

慶尚南道における近代女子教育の展開 —日新女学校の事例研究

古川 宣子 (大東文化大学国際関係学部)

The Expansion of Modern Girls' Education in Gyeongsangnam-do -A Case Study of Nisshin Women's School-

Noriko FURUKAWA

はじめに

本稿で扱う日新女学校は、豪州長老会が1895年に慶尚南道の釜山府に設立し、植民地末期まで運営した私立の宗教学校である。1919年の三一独立運動の際には、教師と生徒が釜山地域で目覚ましい役割を果たし逮捕・投獄されたことでも有名であり、また女性独立運動家として名高い朴次貞が学んだ学校でもあった。現在、その後身にあたる学校が東萊学園として運営されており、歴史が引き継がれている。また当時の校舎は、現在も釜山市の史跡（釜山鎮日新女学校旧校舎）と東萊学園の日新館（東萊日新女学校旧校舎を移築）として保存されている。教育史・宗教史でも、歴史が古い女学校として紹介されており、1995年には創立100周年を記念する学校史も発行された。

しかしこの学校について考察した個別論文は管見では、概説を扱った李元浩と東萊日新女学校の体育活動に注目したもののみであり¹⁾、その体系的な考察は未だされていない。その背景には、この学校の歴史の複雑さと、外国人が運営する宗教学校で地方に所在したこと、植民地学校制度で傍系にあたる私立各種学校であったことなどが原因として考えられる。植民地期朝鮮の教育において「私立各種学校」が果たした役割にほとんど光が当てられていない現在、この学校の歴史を明らかにすることは非常に重要であると筆者は考えている。

後述するが、日新女学校の現在までの沿革は複雑である。開港期の朝鮮近代教育史の黎明期にあたる1892年から豪州長老会宣教師によって活動が始められたが、植民地末期になり神社参拝問題のために閉校を余儀なくされた。その際、当時中等学校として運営されていた東萊日新女学校は、地域の朝鮮人有志による学校継承のための運動が起こり、亀山財団を経営主体とする一般校として1940年に私立の高等女学校としてそのまま維持することが可能となった。解放後は校舎を1987年に釜山市金井区の現在の位置に移転させ、現在東萊女子高等学校・東萊女子中学校など5学校を有

する教育財団として維持されている。一方、初等学校として運営されていた釜山鎮日新女学校は、宗教学校が閉鎖された後は、公立小学校(分教場)として植民地公教育機関となり、学校施設が利用され生徒も引き継がれた。

また学校所在地も、学校が発展的に運営される中で変化した。学校としてスタートした1895年の場所から、1905年に校舎新築に伴い数十メートル離れた佐川洞768番地へ、そして1925年に中等部は独立して東萊郡に移り、初等部分も1936年になると佐川洞780番地へと校舎を新築し更に移転した。

こうした、学校の拡大に伴う初等・中等の分離独立化、そして宗教学校の閉校を経て私立学校として引き継がれたのが中等学校部分のみであったことなどから、先行研究では日新女学校という場合に、中等学校の東萊日新女学校に代表させて描かれることが多く、特に初等教育部分についての考察はほとんどされていないことが問題である。

本稿ではこうした点を念頭に、1895年に釜山鎮で始まった日新女学校を釜山鎮日新女学校とし、1925年に中等部が東萊郡に移転したものを東萊日新女学校として区別し、総称としては日新女学校とし、宗教学校として運営された1939年までを基本的に考察する。よって、釜山鎮日新女学校は1925年中等部の分離以前は初等・中等(1909年～)併設校であり、分離以後は初等みの学校を意味する。このようにしながら、初等・中等を区別しつつ、日新女学校の全体像に迫りたい。

第1章 豪州長老会の慶尚南道における活動

第1節 初期の活動

近代朝鮮における基督教の布教は、アメリカ人プロテスタント宣教師として、長老会のアレンやアンダーウッドが1884・1885年に、そして監理教のアッペンゼラーも同時期に朝鮮に赴任し、朝鮮における2大教派として監理教と長老教が形成されていく²⁾。朝鮮近代教育の導入期における宗教系学校の役割は大きく、時期的に見ても、1895年の甲午改革で国家による近代学校制度の導入がされる以前に、欧米宣教師による宣教活動の中で近代学校が設立された。女子教育としては、ソウルに1886年梨花学堂が米国北監理教会によって設立されたのをはじめ、女子教育機関が次々と設立されていった³⁾。

こうした欧米人の宣教活動のスタートとほぼ同時期に、オーストラリア長老会(以下豪州長老会)による慶尚南道・釜山地域での宣教・教育活動も始まっている。豪州長老会から宣教のために初めて朝鮮に渡った牧師はデイビス J.H.Davies である。1989年10月「朝鮮で(豪州一引用者)ビクトリア長老教会を設立するため」だったという⁴⁾。1910年代半ば第4代日新女学校の校長を務めた女性宣教師デイビス M.S.Davies(代瑪嘉禮⁵⁾)の叔父にあたる彼は最初ソウルに滞在したが、当時首都ソウルおよび平壤など北部朝鮮では米国長老会や米国監理教会などによる宣教活動が展開されており⁶⁾、宣教地域を慶尚南道地方とする目的で釜山に向かったが、ここで若くして病死した。

翌年9月、豪州のメルボルンで長老教女子宣教連合会(Presbyterian Women's Missionary Union

以下、P.W.M.U と略) が結成され、豪州長老会の活動中心地を釜山など慶尚南道一帯とする方針が正式に採択された。こうして、豪州長老会の組織的な活動が慶尚南道で開始されることになった。1891年10月には、メッケイ Mackay 牧師夫婦、そして独身の女性宣教師でそれぞれ第1・2代日新女学校長となるメンジス B. Menzies とペリー J. Perry などが釜山に到着している。その他、モア E. Moore (92年到着) や、全南韓の豪州長老派教会の監督者としてアダムソン Adamson 牧師夫婦 (94年) など⁷⁾ が続々と朝鮮に渡った。

1900年になると、エンゲル G. Engel (王吉使) 牧師夫婦が P.W.M.U の事業監督官として到着し、1910年には後の財団代表であるマッケンジー J. N. Mackenzie 牧師 (梅見施) 及び、後に日新女学校第4代校長となり、最も長期にわたり校長を務めたデイビス M. S. Davies が、そして続けて翌年には後に日新女学校第3代校長を務めるアレキサンダー M. L. Alexander (安珍珠) が入国している。

こうした人々が、1892年からは釜山鎮で孤児に対する教育活動を開始した。そして1895年になると、日新女学校という名前で初等教育を開始する (後述)。これが、豪州長老教会が宣教活動の一環として行った教育活動の中で、最初に設立した学校⁸⁾ であり以後40年以上にわたって、発展的に運営されていくことになる日新女学校の始まりである。豪州長老会は朝鮮における宣教・教育活動の初期の段階で、釜山鎮で日新女学校を同会最初の学校として設立し、以後教育活動の中核的存在として発展させていくことになる。

学校運営の核となるデイビス、マッケンジー、エンゲルなどの日新女学校の設立者・校長となる人物は1910年前後までに朝鮮に入り、長期に滞在し活動した。1893年の孤児教育の開始から釜山鎮日新女学校第1代の校長となるメンジス B. Menzies は1924年まで釜山で教育活動を行った。また釜山鎮日新女学校第4代校長を1914年から務め、後に1925年に東萊日新女学校が設立されるとその第1代校長となるデイビスは1939年の閉校まで活動を続け、メンジス同様その活動が30年以上に及んでいた⁹⁾。

この期の宣教師の教育活動と女子教育の難しさについて、1910年代学務局長を務めた弓削幸太郎¹⁰⁾ はその著書で、「特筆すべきことは女子教育を開始したことで、朝鮮では習慣上良家の子女の外出することすれ容易でなかった、又女子に学問は無用とせられて居った。然るに公の場所で教育をなすと云うは余程の苦心があったことと想像せられる」とその意義について語っている。

豪州長老会の慶尚南道における併合前の教育活動に関して、1908年8月に公布された私立学校令による認可状況がわかる。私立学校令は、日本の統監府政治がはじまり私立学校を対象とする初めての法令であった。この法令により、当時4・5千ともいわれた膨大な数の私立学校が把握し統制・管理されていくことになる。「私立学校ヲ設立シヨウトスルモノハ (中略) 学務大臣ノ認可ヲ受ケルベシ」と第1条で規定された¹¹⁾。施行は同年10月1日であり、既存の学校についても、「施行日から6カ月以内」という期限を区切って学務大臣の認可を受けるように規定された (第17条)。豪州長老会が経営する諸学校も併合前にこの法令による認可を受けており¹²⁾、以下のとおりである。

表1 豪州長老会経営の認可校

地域	学校名	認可日
釜山府	日新女学校	1909.8.8
昌原郡	昌信学校	1909.8.19
馬山府	昌信学校	1909.8.19
晋州郡	光林学校	1909.8.31

出典:朝鮮総督府内務部学務局『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』1912年度版、付録の「欧米人及関係学校調」43・44頁。
注:認可日付について、日新女学校については学部大臣名による「認可指令書」などの資料が残っており、そこでは8月9日の記載がある。

1909年8月時点で少なくとも4校が認可校として、釜山・昌原・馬山・晋州地域で運営され、設立者・校長は順に、エンゲル:釜山、アダムソン A.Adamson (孫安路:昌原・馬山)、カーレル H.Curell (巨烈傑:晋州) であり、釜山の日新女学校についてのみ設立者が2名おり、もう一人はアレキサンダーであった。

第2節 植民地期の活動

1) 1910年代

「併合後」基督教系宗教学校に対して総督府は、治外法権を有する欧米宣教師が運営し、また当時近代学校として多数を占めていることなどから、その扱いに「苦心」する中で、私立学校について、1911年私立学校規則、1915年改正私立学校規則¹³⁾と、次々と関係法令を制定していった。特に1915年の法令では、既に運営されている宗教学校には10年間の猶予が与えられたが授業の教科目として聖經を教えることができない規定となり、また、教師の資格が設けられた。

1910年代の活動状況について、まず1912年資料を検討することで、豪州長老教会の慶尚南道における教育活動について考察したい。

朝鮮総督府学務局によると、1912年時点でのプロテスタント系基督教で学校を運営している各教派は、長老系が米国北・米南・カナダ・豪州長老教会及び、監理系は米国北・米南監理教会の6宣教会であった¹⁴⁾。一方、弓削幸太郎によれば、これらプロテスタント6宣教会は教育組合を結成しており、その学校数は415校(1912年5月末現在)であり、これらは「朝鮮に於ける基督教の大勢力を集めたものである」¹⁵⁾とされている。以上のプロテスタント以外に基督教系宗教学校としては、カトリック(フランス・ドイツ天主教会)、そして、ロシア正教会、イギリス聖公会などがあり、当時総督府が把握していた基督教系宗教学校の総数は450校であった。プロテスタント系教会が運営する学校が基督教系宗教学校の全体の9割以上を占めていたことがわかる。ただし、プロテスタント6宣教会の中で、豪州長老会が経営した学校は5校しかなく最も学校数が少なかった¹⁶⁾。

この5校の所在地としては、慶南のみで3地域にわたり運営されており、釜山府には日新女学校以外に「釜山府邑内面」(1914年の行政区分変更で、東萊郡に編入)所在の信明学校があった。この学校の設立者は日新学校と同じくエンゲルとなっているが、校長は朝鮮人朴文吉であった。設置

認可は1912年11月28日であり、1909年8月の4校認可の後に設立されたようである。その他は、先述した昌原郡の昌信学校、馬山府の昌信学校、晋州郡の光林学校である¹⁷⁾。これら5校の中で、運営の詳細が載っているのは以下の3校である¹⁸⁾。

表2 1912年豪州長老会経営の私立学校詳細

地域	学校名	教員数	生徒数	出席数	経費(円)
釜山府	日新女学校	7	65	63	1954
馬山府	昌信学校	3	108	106	653
晋州郡	光林学校	3	40	37	417

出典：朝鮮総督府内務部学務局『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』1912年度版、87頁

注：生徒数は、資料では「在籍学生数」となっている。

この資料では、道別の基督教系学校についても掲載されており、慶尚南道の基督教系学校は9校であった。その内訳は、プロテスタントは全てが長老派の8校であり、カトリックは1校のみである。この長老派の中で豪州長老会が運営する学校が5校を占めており、豪州長老会が慶尚南道の宗教学校で当時最も多くの学校を現在運営していたことが確定できる。その他の長老派としては米国北長老会が金海・昌寧・釜山で各1校ずつ運営していた。

次に、豪州長老会が経営する学校の1915年状況を『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』（1915年度版）によってみてみたい。前述の1912年統計では初等教育と中等教育の区別がされていなかったが、1915年版ではそれがわかる（表3参照）。

表3 1915年豪州長老会経営の学校状況

地域	学校名	教員数	生徒数		経費(円)
			初等	中等	
東萊郡	信明学校	2	28		660
釜山府	日新女学校	6	116	136	2188
馬山府	昌信学校	7	118	27	1678
	義信女学校	6	35	18	1200
晋州郡	光林学校	6	54	11	2446
咸安郡	安新学校	3	78		1000

出典：朝鮮総督府内務部学務局『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』1915年度版、123～126頁。

注：生徒数は、資料では「在籍学生数」となっている。

活動地域としては5地域であり、1912年の釜山府(東萊郡)・馬山府・晋州郡・昌原郡の昌原郡の代わりに咸安郡が入っている。継続している地域でも、馬山府で義信女学校が新しく掲載されており、また晋州郡の光林学校では生徒が男女となっている点に変化した。高等科を4校が併設しており、日新女学校・昌信学校(男)・義信女学校・光林学校(男女)だった。豪州長老会が、地方の状況で男子・中等教育も併せて行っている様子が伺える。

なお1915年の慶尚南道の基督教宗教学校は11校となり、1912年と同様にプロテスタントは長老派のみで9校、カトリックはフランス天主教で2校であった。豪州長老会は6校を占めており1912年と同様に慶尚南道の基督教宗教学校で最大だった。長老派の他の3校は北米長老会が経営するものだった。豪州長老会は慶尚南道でのみ教育活動を展開しつつ、基督教学校の中では地域最大の勢力であった。

2) 20年代30年代

豪州長老会がつくった「財団法人豪州ヴクトリア国長老教朝鮮宣教会維持財団」(以下、維持財団と略)が道知事に提出した1928・34・35年についての『業務報告書』を確認できる¹⁹⁾ので、ここから1920年代、30年代の教育活動を明らかにしたい。この中には、前述した1910年代の学校統資料には掲載されていない、幼稚園・女子実業学校についても言及されていて、同教会の活動が、初等・中等以外でも教育活動をしていた詳細が明らかである。この資料は、維持財団が作成した一次資料であり、当時の豪州長老会の教育活動を把握する上で最もよく知ることができるものの一つだと思われる。

教育活動の中核となったと思われる初等・中等学校についてまとめると、表4のとおりである。それらは、釜山(釜山府及び東萊郡)・馬山・晋州の3地域で運営されており、この3地域で同財団が主要な教育活動を展開していた。

表4 豪州長老会経営の初等・中等学校生徒数

年	地域	中等学校		初等学校		中等・初等生徒計		
		女子校	男子校	女子校	男子校	女子	男子	男女計
1928	釜山	120		230		350		350
	馬山		88	162	181	162	269	431
	晋州			150	100	150	100	250
1934	釜山	144		250		394		394
	馬山		9	233	177	233	186	419
	晋州			282		282		282
1935	釜山	142		260		402		402
	馬山		9	230	170	230	179	409
	晋州			285		285		285
計		406	106	2082	628	2488	734	3222

出典：注19)と同じ

学校数は生徒の掲載があるものにつき各1校ずつである。豪州長老会は1928・34・35年に順に7校・6校・6校の学校を運営していた。中等学校は男女各1校、そして女子の初等学校3校はこれら全ての年で運営されていた。減じているのは男子の初等学校で、1928年には2校あったものが1934年に晋州の1校が無くなり馬山のみとなった。

学校の男女別でみると、1928年に女子校は4校に対して男子校は3校だった。これが、1934年になると、女子校は変わらず4校が維持されている一方男子校は2校となり、校数として女子校が男子校の2倍を占めた。生徒数でも、これら3カ年の総計で見た場合、女子の2488人に対して男子は734人であった。男子の3倍以上の女子生徒を教育しており、ここからも、豪州長老会は学校数・生徒数共に女子教育を中心に活動していた事が明らかである。

こうした女子教育重視は、女子実業学校を運営していたことにも表れている。1928年の資料から女子実業系の教育活動として統営・居昌で、1934年資料では釜山でも実施されていたことがわかる。1928年の機関名は「女子実業講習所」であり、1934・35年は共に「女子実修学校・女子講習所」（前者が釜山、後者が統営・居昌）となっている。また、釜山・馬山・晋州・統営・居昌5地域全域で幼稚園も運営されている。

学校教育が展開された3箇所の地域状況について、最後に触れたい。晋州は、朝鮮王朝時代まで慶尚南道の行政府が置かれた道の中心地であり、植民地期になって日本人の集住地域を中心に「釜山府」が設置され開発が進んでも、慶尚南道庁は1925年までは所在しており（以後は釜山府に移転された）、前近代からの道の中心としての伝統的機能を持っていた場所であった。こうした関係で、晋州には朝鮮人を対象とした正規の中等教育機関が男女共に1925年から設立されていた。男子は公立晋州高等普通学校、女子は私立一新女子高等普通学校である²⁰。これらは慶尚南道で男子は2番目、女子は最も早い朝鮮人を対象とする「正規（＝高等普通学校・女子高等普通学校）」中等教育機関として設立されている。豪州長老会が運営する男子初等学校が無くなったのは、こうした中等教育機関が設置され植民地期に進行していた学歴競争で、学校が私立各種学校だったために高等普通学校への入試競争で不利な立場に置かれたための可能性がある。

馬山は地方の中核都市であり、男子中等学校を運営していた。1934年にはその生徒数は激減するが、初等では男女の学校を運営し、初等・中等の男女総計生徒数では、最も多くの生徒数が集まっていた。なおこの男子中等学校の生徒数が1928年の88名から1934及び35年は9名にまで落ち込んだ背景には、この学校が高等普通学校や指定学校でなく、中等程度の私立各種学校であったためでないかと推測される。

釜山地域（釜山府・東萊郡）ではこの時期には、女子教育のみを中等・初等学校の両方で展開していた。中等・初等合計を女子生徒数のみで見ると他の2地域を大きく上回り、かつ安定した人数を確保していた。開発の進んだ釜山地域では女子の教育に特化しての学校教育を行っていたことがわかる。

第2章 日新女学校の沿革

第1節 前史—孤児教育

前章で豪州長老会の慶尚南道全体での活動状況を見てきたが、以下では日新女学校に焦点をあてて、学校沿革について時期区分を試みながら、その発展・展開過程を整理したい。

日新女学校の前史にあたるのが、1892年に始められた孤児に対する教育活動である。メンジスとペリーなど女性宣教師が、近隣の幼い女の子の孤児3名を、自らの住居で養育し教育し始めた(釜山府佐川洞)。その名前は豪州先住民の言葉をとってミューロ Myoora 孤児院とされた。孤児教育は「韓国人のために働く宣教師をつくる目的で幼い時から教育しよう」という目的があったという。住居は、朝鮮式伝統家屋「藁ぶき家3間」だった。なおこの場所は現在、「日新基督教病院本館」となっている。1905年にはこの場所から少し丘を登った場所に校舎を移転した。この時の活動について『東萊学園100年史(1895—1995)』(以下『100年史』と略)では豪州宣教会の記録として以下の様に紹介している。

1892年に先駆的な豪州宣教会の女性伝道使である、閔之使嬢(メンジス—引用者)とペリー嬢が最初の女学校の母体を胚胎させた。かれらが来韓した翌年(1892年)閔之使嬢とペリー嬢は3名の孤児を自分の家に連れてきて韓国人のための宣教師を育てる目的で幼い時から教育を授けようとした²¹⁾

なお、東萊学園に保存されている日新女学校の『学籍簿』の中には、宣教師の養女と記載されている者が見受けられる。孤児教育という当初の活動の性格は、宗教学校として昼間の教育を行うようになってからも、継続した可能性がある。

第2節 学校開始(1895年～)

孤児教育から数年後の1895年10月15日には、日新女学校という名前で初等教育機関として立の活動を開始した。このことについて、「釜山鎮日新女学校調書」に含まれる「釜山鎮日新女学校沿革」では、

明治二十八年十月十五日 豪洲婦人伝道部主トナリ同宣教師会管理ノ下ニ設立セラレ釜山鎮佐川洞所在ノ一小家屋ヲ借受ケ校舎トナシ私立日新女学校ト称ス(中略)生徒二十八名ヲ募集ス

と記されている²²⁾。これは「修業年限3年」の小学校だったといわれる²³⁾。初代校長は孤児教育を始めたメンジスである。一方、建物については「藁ぶき3間に創立」としているものもあり孤児教育を行っていた従来の住居と同一かどうか判別しがたいが、学校施設としては依然として脆弱で、個人宅で行う伝統教育機関の「書堂」教育的な性格を持っていたといえよう。

「近代学校」としてどれだけ内容を持ちえたかは、今後この期の教育内容などが明らかにされる必要があるが、教師としての西洋人宣教師達は近代教育を受けてきていると考えられ、釜山直轄市

教育委員会が1987年に発行した『釜山教育史』では「釜山の女性たちを開化させるのに大きな貢献をし、当時としては釜山で唯一の女子校だった」²⁴⁾と、高く評価されている。孤児院から昼間の学校への移行の様子を豪州宣教会は

その後より多くの少女たちが集まってきたので、小さな孤児院から1895年に昼間の学校を設けることになり、(中略)日々にぎわったので学校の名前を日新と呼んだりもしたとしたという²⁵⁾。こうした「昼間」制の学校への移行は、孤児を育ててキリスト教徒とするという性格から、その対象を広げ「普通の朝鮮人家庭の子供」を教育するという、一般化への変化があったと言えよう。

第3節 発展 (1905～1925)

日新女学校は学校開始約10年目に、校舎を新築し移転した。1905年4月15日、場所は従来場所から丘の側に数十メートル上った中腹の場所である。西洋式レンガ造り瓦屋根・平屋の建物で大変重厚な造りになっている²⁶⁾。移転と同時に、課程名も「小学科」から「初等科」に変更した(「釜山鎮日新女学校沿革」²⁷⁾)。

そして、1909年になると8月9日付で私立学校設立認可を時の学部大臣李載崐から受けている。学校住所は「慶尚南道東萊府釜山面佐1里」、校長名は「王吉志」すなわちエンゲルのことである。この時「修業年限三ヶ年ノ高等科ヲ初等科ニ併置ス」と「釜山鎮日新女学校沿革」では記され、女子に対する6年制の初等・中等教育が実施できる体制となった。

この高等科は第1回の卒業生を1913年3月に4名出しており、その一人の卒業証書が残されている²⁸⁾。同年3月31日付で「第3号 卒業証書」となっており、この卒業生は近くに住む(釜山鎮2洞)22歳の女性であった。「右の者が本学校高等全科を修了したのでここに卒業証書を授与する」という文言で、学校名称は「釜山鎮私立日新女学校」となっていた。学校認可指令書では「私立日新女学校」と記載されており、立地する地名である「釜山鎮」をつけて学校名が通称されていたようである。校長としてエンゲル、教員として宣教師のメンジスとアレキサンダーの名前があり、その他朴信淵、金道善、李誕實、徐致物、川窪千代と記されている。8名中で、3人が豪州人(宣教師)、4人が朝鮮人、1人が日本人となっていた。

1915年8月になると、「学則変更スルコトヲ許可セラレ此迄修業年限初等科三ヶ年ヲ四ヶ年高等科三ヶ年ヲ四ヶ年トス」という「釜山鎮日新女学校沿革」の記載があり、修業年限を初等・中等教育共に1年の延長を断行し、各4年計8年制へ大幅に延長したことになる²⁹⁾。第1次朝鮮教育令で規定された1910年代の学校制度では、正規の初等教育機関である普通学校は4年制であり地方の都合では「3年制も可」とされており、また女子高等普通学校は4年制であった。日新女学校は植民地学校制度上では正規の学校でなく「各種学校」に分類される私立の宗教学校であったが、教育課程の長さとしては、同時期の正規の学校と同レベルの教育を実施する学校であったことがわかる。一方1927年に「釜山教育会」が発行した『釜山教育50年史』にも、「釜山鎮日新女学校」というタイトルでその詳細と校舎の写真が掲載されており³⁰⁾、これは同校が地域社会で高い評価を

得ていたことの表れと考えられる。

第4節 飛躍(1925～1939)

1895年に学校としてスタートして30周年目にあたる1925年に、日新女学校はその中等教育部分を新たに分離・独立させる形で大規模な校舎を、当時の行政区画では東萊郡に建築した。日新女学校の2校体制化である。初等部分は従来どおり釜山鎮で継続され(釜山鎮日新女学校)、中等学校が東萊日新女学校として運営されることになった。

新たな中等学校の所在地は東萊郡東萊邑福泉洞500番地で、東萊日新女学校という名称はこの地名によると思われる。従来どおり4年制の中等教育機関で私立各種学校であった。学校建設工事は、1924年に着工されたが、現在「豪洲女子傳道部 主后 一千九百二十四年 十二月二十日」という石造物が元の校舎と共に残っており、工事の着工を記念するものでないかと思われる。完成した校舎への移転は1925年6月10日に行われ、また設置認可は同年12月23日に東萊日新女学校という名称で受けていた³¹⁾

当時の新聞でも度々その校舎の写真が掲載されている東萊日新女学校は、校地総坪数が9033坪、校長舎宅は26坪で、校舎は265坪(2階建て)の壮大な石造建築であった。2階建ての寄宿舍(162坪)も備えており、近隣からの通学者のみでなく、遠方からの生徒も入学し易かったと思われる。同じ東萊邑にあった、公立東萊高等普通学校と非常に似た造りになっていて、中等教育機関としての威容を誇り学校規模として引けを取らなかった。

この中等部分の移転について、宣教会では初等も含めての移転を予定していたが結局中等のみの移転となったという以下の記述がある。

東萊に中等学校設立の必要性が提起された時、釜山鎮初等学校も東萊に移る計画だった。しかしこの計画は東萊地域の支援が不確実で3年間延期することが決まった。その間に公立学校(government school)が東萊に建てられて、釜山鎮初等学校は学校の必要性がより重大な釜山鎮にそのまま残すことが決定された³²⁾

実際に、東萊邑には女子のみの東萊第二公立普通学校が1925年4月に開設されており、同じ邑内での正規の公立初等学校との競合を避けた可能性が高い。

移転した東萊日新女学校は、1926年3月にその第1回卒業生(1925年度)を出しており、その記念写真が現在残されている。新校舎の玄関前で、中央には設立者のマッケンジーと校長のデイビスおよび6名の教員とみられる人物(女性1名・男性5名)と共に、卒業生13名がチマチョゴリ姿で映っている。教員6名の内、洋服にネクタイ姿の男性が3名、朝鮮服の者が3名で女性一人はチマチョゴリ姿の崔明烈という女性であることがわかっている。

中等教育機関としての独立した東萊日新女学校にとってこの期に大変重要だったのが、指定学校化であった。同校は、1934年に指定学校の資格を得た。指定学校とされると、私立の各種学校であっても上級学校に進学する際に、その卒業生は女子高等普通学校を卒業者と同等の資格が付与される。学歴競争が進行していた朝鮮で、正規の官・公・私立女子高等普通学校でない私立各種学校

としては、学生募集の点などからも指定学校となることは重要であった。しかし、その条件は厳しく、教員免許状保持者など資格教師や、生徒の教育程度の保証で特に日本語、そして学校施設などの条件を満たすことは決して簡単ではなかった。

当時の朝鮮全体の女子中等教育機関の中で指定学校は、崇義女学校（1931年～）に次いで東萊日新女学校が2校目である。その他1934年段階で、正規の学校として女子高等普通学校は官・公立7校および私立10校の計17校しか存在していない。後述するが、慶尚南道全体では、晋州に一新女子高等普通学校が私立として1925年から、釜山府に釜山女子高等普通学校が公立として1927年から運営されており、正規のこの2校と同じレベルとして上級学校入学に際しては扱われる資格が付与されるということである。東萊日新女学校の指定学校化は、1926年に新聞で「目下当局に指定女高普校を極力運動中」³³⁾と報道されるなど、20年代後半からその動きが認められる。

一方、釜山鎮日新女学校は1925年に初等科が6年制に延長された。「釜山鎮日新女学校沿革」で以下の様に明記されている

大正十四年十二月二十五日学校ノ目的及学則変更ノコトヲ認可セラレ高等科ハ之レヲ廃止シ
在来ノ修業年限四ヶ年ノ初等科ヲ六ヶ年トス 校名を釜山鎮日新女学校ト改称ス³⁴⁾

当時、普通学校でも4年制の学校が広範に存在していた中で、釜山鎮日新女学校は6年制の女子初等教育を実施した。1926年10月末現在、「釜山鎮日新女学校」は³⁵⁾、校長をウィザース M. Withers（衛大恕）が務め、教員は朝鮮人の呂運英、金水先、呉明珠、丁錫漸、李鳳学の5名で、生徒は184人おり、6学級編成で、校地は546坪の広さで、普通教室6となっており、1学年1学級構成で運営されたと判断される。また当時の校舎の写真の掲載もあり、平屋の煉瓦造りの西洋建築は1926年には2階建てに増築されていたことが確認できる。そして1935年頃には、釜山鎮日新女学校も、広大な校舎を新築し移転している。場所はそれまでの場所から更に少し丘の上ののぼる形で隣接していた³⁶⁾。

第5節 1939年宗教学校としての廃止

以上のように、中等・初等共に校舎規模を拡大し目に見える発展をしてきた日新女学校であるが、神社参拝問題により総督府から学校への「廃止命令」が1939年に出された。

当局の神社参拝を強要する教育政策に対して、豪州長老会は信仰の点から拒否を決め、宗教学校としては存続が出来なくなった。この状態の中で、東萊日新女学校は、東萊の地域住民が亀山学院財団を組織し学校運営を引き継ぐ努力がされ、その際に正規の高等女学校として「昇格」する形で、私立東萊高等女学校となり、1940年5月30日に開校式が行われた。

一方の釜山鎮日新女学校は、従来の研究では不明だったが、宗教学校として1939年7月に閉鎖された後、公立化され「小学校佐川分教場」として引き継がれたという報道がある。それによれば、日新女学校は翌月8月1日に公立の小学校の分教場に改変されたという。9月13日に行われた開校式に関連して、

三百廿名の児童はキリスト教主義の教育より一変して公立学校児童として国体明徴皇室中心

の非常時下国民教育の恩恵に浴する事となり宮城遙拝、国旗掲揚、神社参拝等日本精神主義教育の諸施設の中に(中略)開校式

を迎えたという。また式当日には全校生に廃品回収をさせて集めたお金を「開校記念」として「感謝の印」として釜山憲兵分隊へ教師につれられた児童6名が手紙を添えて共に訪れたという。手紙には三学期が始まりますと新しい先生がお出でになり色々新しい事や珍しい事が澤山あり、当校正面の講堂に国体明徴内鮮一体忍苦鍛錬の大字が書いてあります。教室の中もすっかり変わりました。毎朝宮城遙拝皇国臣民の誓詞斉唱、愛国日の竜頭山神社参拝其他毎日の事は嬉しいことばかりです。私達は今後立派な公立学校の生徒として一生懸命勉強し忠良な皇国臣民となります(後略)³⁷⁾。

と、教師の作文指導が伺える決まり文句のような文章の中に、それまでの基督教主義学校とは教育の性格が大きく変わった様子が伺える。天皇制教育として神社参拝が強制される中で釜山鎮日新女学校はその40年余りの歴史を閉じて廃校となり、その後は施設・児童は公立の小学校に改変されて植民地教育機関化されたことが確認できる。そして、豪洲長老会の宣教師は1942年には全て強制的に退去させられ、1892年の孤児に対する教育活動の開始から50年間余りに渡っての朝鮮女子教育の幕を閉じることになった。

第3章 日新女学校の運営状況—生徒数を中心に

第1節 生徒状況 釜山鎮・東萊

植民地期に私立各種学校と分類された学校の運営実態を解明することは非常に難しく、特に初等程度の学校については現在もほとんど明らかにされていない。それは、「資料」上の問題が大きいと思われる。総督府の正規の初等教育機関である普通学校(官・公・私立)であれば、学校別の運営実態が総督府学務局が毎年発行した『朝鮮諸学校一覧』に掲載されている。しかし管見した同書1918年版以降での私立各種学校についての扱いは、道別の集計値であって学校別での記載はされていない。総督府の私立学校政策は、1915年の私立学校規則の公布で、一応の「統制」可能ラインに入ったと思われるが、それ以前には詳細な運営状況などの把握が行われる必要があったとみられ、総督府学務局は1912年及び1915年について『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』を発行していた。この両年以外に、総督府が刊行した諸統計には、個別の私立各種学校について広範に調査し、通時的に把握できるものが管見ではない。

日新女学校も私立各種学校であったために総督府の刊行物には、非常に限定的にしか掲載されていない。ここでは、『釜山府要覧』や『慶尚南道要覧』のような地方行政府が発行した物などを利用して、できるだけ通時的な解明を行いたい。

日新女学校全体の生徒一覧は以下の表5、釜山鎮日新女学校についてグラフ化したものが図1である。なお、生徒数を調査する中で、初等・中等分離後の1926年以降の生徒状況については、複数の資料を比較して分析し、両校の生徒数の区分を試みた。資料の一つ『釜山府勢概況』(1928年

発行) では 1926 年「4 月値」として 197 人であった。この資料以外に、釜山教育会編纂の『釜山教育 50 年史』でも、同年「5 月現在値」が 197 名³⁸⁾であったことから、東萊日新女学校が独立した翌年度当初の釜山鎮日新女学校の生徒数が 200 名弱だったことが複数の資料で確認できた。よって表 5 では、釜山鎮日新女学校の 1925 年までは初等・中等合計値、そして 1926 年以後は初等のみとしての数値であることを明記しておく。

まず釜山鎮日新女学校について、初等・中等分離前をみると、10 年代前半の生徒数は 100 人に満たなかった。しかし 10 年代後半になると 100 人を超え、20 年代に入り 200～300 人程度の生徒数を維持した。そして同校の 1925 年以後については、初等と中等別の数値となるが、1930 年以前は 200 人前半だったのが 30 年以後は 260 人台で安定していて、特に 30 年代に安定的に運営されていた様子がわかる。

表 5 日新女学校生徒

年度	釜山鎮	東萊
1912	65	
13	65	
14	71	
15	96	
16	118	
17		
18		
19	165	
20	196	
21		
22		
23	281	
24	263	
25	289	
26	197	
27	207	
28	231	120
29		
30	260	
31	262	
32	264	115
33	265	110
34	263	122
35		144
36		164
37		174
38		181
39		192
40		206
41		220
42		233
43		226

図 1 釜山鎮日新女学校
生徒推移



出典：表 5 と同じ

出典：釜山鎮日新女学校は『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』1912 年、『慶尚南道学事及社寺宗教一斑』1923 年（5 月末現在）、『釜山府勢概況』1928 年（4 月現在）、『釜山府勢要覧』1921 年・1934 年（4 月現在）。

東萊日新女学校は『朝鮮諸学校一覧』各年版。

注：1913～20 年は『釜山府勢要覧』1921 年の数値。なお、1915 年について『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』では、初等 116 名・高等 136 名・計 252 名となっている。1924～28 年は『釜山府勢概況』1928 年の数値。

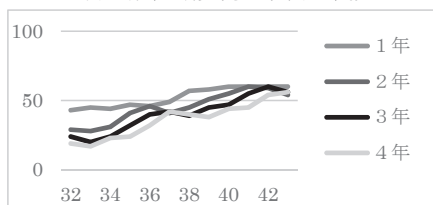
次に、1925年に分離した中等教育機関の東萊日新女学校について見てみたい。東萊日新女学校の運営状況については、1932年以降その詳細がわかる。『朝鮮諸学校一覧』の私立各種学校掲載様式が1932年以降変化し、私立各種学校の中でも「中等程度」については学校別に掲載され始める中で「東萊日新女学校」の運営状況がわかり、学校組織が変更された1940年からは私立東萊高等女学校として1943年までを通時的に把握できる。1943年まで4年制中等教育機関として、4学級であり、各学年1学級制をとっていた。

生徒総数は1934年までは120人程度であり、その後毎年20名程度ずつ漸増し、1940年には200名程度の生徒を抱える学校として運営された。生徒の学年別人数も同統計で掲載されており、『100年史』に掲載されている卒業生数と併せて整理したものが表6であり、学年別推移についてグラフ化したものが図2である。

表6 東萊日新女学校 学年別生徒数

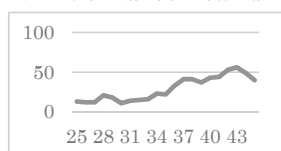
年度	生徒数				卒業生数
	1年	2年	3年	4年	
25					13
26					12
27					12
28					21
29					18
30					11
31					14
32	43	29	24	19	15
33	45	28	20	17	16
34	44	31	24	23	23
35	47	41	32	24	22
36	46	46	40	32	33
37	49	41	42	42	41
38	57	45	39	40	41
39	58	51	45	38	37
40	60	55	47	44	43
41	60	60	55	45	44
42	60	59	60	54	53
43	60	54	56	56	56
44					49
45					40

図2 東萊日新女学校 学年別生徒数



出典：表6と同じ。

図3 東萊日新女学校 卒業生数



出典：表6と同じ。

出典：学年別生徒数は『朝鮮諸学校一覧』各年版（5月末現在値）。

卒業生数は『東萊学園100年史（1895 - 1995）』560～561頁。

注：1940年以降は私立東萊高等女学校となつてからの数値。

学年別の学級規模がわかる最初の年である1932年度の場合を見てみたい。各学年の人数は、1年生が43名であるのに対して、2・3年生は各29・24名と上級学年にいくほど規模は減少し、4年生は19名で1年生の半数にも満たない学級構成となつていた。また、1932年度の卒業生数は15名だったことから、4年生5月末にいた19名が年度末までに更に減少した。1930年代初頭になつても中途退学者が非常に多く、学年による学級経営規模に大きな差が生じていたことが明らかである。

この中途退学状況について、更に入学年を基準としてどれだけの生徒が進級したかを分析したい。例えば卒業生数が40名を初めて超えた1937年度の場合、この生徒たちが入学したのは1934年度でありその5月末値である1年生数は44名だった。これが2年時には41名、3年時には40名、4年時には42名となり、卒業する際には41名となつていた。3年時より4年時の生徒数が多いのは、

復学や編入の生徒がいたためと思われる。中退者はほとんどなく、入学した生徒がほとんど卒業するようになっていたことが伺える。1932・33年度入学者の場合、1年生5月時点で43・45名だった生徒が卒業する際には22・33名にまで減っていた。1934年入学生からは卒業する際に40名を切ることはほとんどなく学校の安定的な運営がされていた。東萊日新女学校は先述のとおり、1934年に「指定学校」としての認可を受けていることが要因の一つとして十分に考えられる。

以上の考察から、東萊日新女学校は、中等部として分離独立した1925年から10年後経過した1930年代半ばから、中途退学が減り学生異動の少ない安定した学校として運営されるようになったと言える。指定学校化、そしてその他、社会経済的環境変化・女子中等教育の定着などが進んでいることが伺える。

なお、釜山鎮と東萊の両者を合計すると、例えば1934年では釜山鎮日新女学校が6学級263名、東萊日新女学校が4学級122名、両者合わせて10学級385名で運営されていたことになる。1910年代前半までの100名以下から、10年代後半の100名台、1920年代以降になると約200～300名、1925年校舎分離後は約400名（1932年から確認可能）の生徒の教育を担う学校だったことが明らかになった。

第2節 日新女学校（釜山鎮・東萊）の地域での位置づけ

1) 東萊日新女学校の慶尚南道・釜山地域における位置

以上、日新女学校の生徒数からその運営状況を考察したが、それでは日新女学校の地域における位置について、まず東萊日新女学校を釜山地域³⁹⁾における中等学校設置状況の中に位置づけて、その果たした役割を検討したい。公立として釜山地域で最初に設立された女子中等教育機関は、1927年に釜山府水晶洞に設置された公立慶南女子高等普通学校（以下、慶南女高普と略）である。それ以前の女子中等教育機関は、私立として1909年から高等科を併設した日新女学校のみであった。

なお慶南女高普の学校運営規模は、各学年50～60名で、1935年までは1学年1学級で計4学級、200名程度の規模であった。1935年時で東萊日新女学校と比較すると、東萊日新女学校が4学級144名なのに対して、慶南女高普は4学級196名で、1935年までは在籍生徒数にそれ程差がなく同規模だったと言える。

ただし1936年以降になると、東萊日新女学校は4学級状態が1943年まで続き、学生数は微増で1943年が226名だった。その一方、慶南女高普は1936年に1年生が2学級化して、生徒数は253名まで増加し、以後学年2学級化が順次適用されて1939年に4学年8学級化し、更に1943年は9学級507名となった。同校の『慶南女子高等学校80年史（1927－2007）』⁴⁰⁾によると1945年には11学級660人となっている。

釜山地域で最も歴史が古い女子中等教育機関として日新女学校が運営され、1927年の慶南女高普の設立以前は唯一の女子中等教育機関として20年近く運営されてきた。また1934年には、専門学校への入学資格も認められる指定学校として教育レベルが認定され、また学校運営も1930年代半ばまで公立慶南女高普と同規模で運営されていた。ただし、1936年以降になると、東萊日新女

学校も生徒数は増加するが、慶南女高普は生徒数が激増していった。1930年代後半は、それ以前に比べて女子中等教育への就学者数が、大幅に増加している様子が伺われる。

次に領域をより広げて慶尚南道全体でみた場合、日新女学の位置はどのようなものになるだろうか。晋州に私立の一新女子高等普通学校が1925年4月に設立され、慶尚南道における正規の女子中等教育機関が初めて開設された。同校の生徒数は、1929年(完成年度の次の年)は129人、1930年140人であった。1932年は136人で、同年の日新女学校は115人である。1935年を見ても一新女高普が4学級181人であるのに対し、日新女学校は4学級144人で、ほぼ同規模であった。

以上、学校の歴史として慶尚南道全体でも日新女学校がもっとも古くから運営され、1925年まで一定の規模で安定的に運営された唯一の女子中等教育機関であった。1943年でみると、公立高等女学校は道内で6校あり、その内訳は日本人のみが1校、朝鮮人のみが1校、晋州公立高等女学校など3校は共学だった。私立は東萊高等女学校のみであった。

2) 釜山鎮日新女学校の釜山府内における位置

次に釜山鎮日新女学校が初等教育機関として釜山府内で女子教育に果たした役割を見ていきたい。中等教育と違い初等教育機関は、設置地域周辺の子供の就学が一般的だったと思われる。『釜山教育50年史』によると釜山府には、朝鮮人初等教育機関として併合前後から複数の公立普通学校があり、そこに「女子部」が設置されていた。釜山普通学校の場合では、その前身の「私立草梁学校」に女子部がありその敷地の一部が釜山普通学校女子部となり、1913年に2教室が増築され、1916年女子部分教場を草梁122番地に設置したという。また釜山鎮普通学校の場合、1909年に校舎を新築し女子部分教場を設け、1916年度には敷地58坪拡張し、また隣接する民有地276坪を買収し女子部を移転したという⁴¹⁾。1926年度現在でみると公立普通学校としては、釜山・釜山鎮・富民・牧ノ島の4校が運営されていたが、全て男子との共学であった⁴²⁾。

しかし、東萊郡東萊邑においては、女子のみの公立普通学校が、東萊第2公立普通学校として1925年4月に開校していた。これは、それ以前は東萊公立普通学校に男女共に就学していたのが、女子のみの普通学校として独立したものである。この学校は1926年5月末現在で、6年制6学級をとり生徒数は349名となっている。釜山鎮日新女学校の同年の規模は6年制6学級197名であり、生徒数では及ばないが学年構成などこの女子のみの公立普通学校と同レベルでの学校体制をとって運営されていた。釜山鎮日新女学校初等部は、1920年代まで地域に女子のみを収容して教育を行う機関が無かった中で、公立普通学校と同レベルの初等学校として地域の女子教育を担ったといえよう。

終わりに

以上、1895年から1939年まで釜山で運営された私立日新女学校について考察した。設立主体である豪州長老会の慶尚南道における活動については、新たに発掘した財団作成の報告書などを利用

することができた。またこの資料などを使いながら、日新女学校の沿革や生徒状況について、東萊日新女学校と釜山鎮日新女学校を区別しながら検討した。特に初等の教育活動を解明する事は難しく、ともすると中等部の運営だけで「日新女学校」が語られがちだった今までの研究を克服するように務めた。

考察の結果、釜山地域で運営された日新女学校について、その創設期から閉校までを対象として、西洋式の校舎建築（1905年）や修業年限の延長、中等部の独立校舎建設移転（1925年）、指定学校化（1934年）、初等部の校舎新築移転（1930年代半ば）などを果しながら、生徒数を増大させ、安定的に運営されていたことを明らかにした。

また、日新女学校の運営主体である豪州宣教会の慶尚南道地域における教育活動について分析を行い、その概要を示すことができた。ただし、指定学校化をめぐる問題や、神社参拝問題による宗教学校としての閉校、そして学校の教師たちについてなど、立ち入った分析ができなかった。これらについては今後の課題としていきたい。

注

- 1) 李元浩「釜山地方教育史研究Ⅰ—豪州長老宣教会の釜山日新女学校設立とその進展」『教育思想研究』第8集、1999年及び、朴キウイスン「日帝強占期釜山日新女学校の体育活動に関する研究」韓国体育史学会『体育史学会誌』19巻2号、2014年6月。
- 2) 李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』社会評論社、2006年、11頁。
- 3) 朴宣美「朝鮮におけるアメリカ・プロテスタント宣教師による女子教育—米国南長老教会朝鮮ミッションを中心に」筑波大学大学院人文社会科学部研究科『歴史人類』第43号、2015年3月、126頁。
- 4) Edith A. Kerr and George Anderson, *The Australian Presbyterian Mission in Korea 1889-1941*, 図書出版キョンゴン、2015年、39頁。本書は1970年にシドニーで出版された原著を韓国の出版社からハン・インス編集で出版されたものである。他に陰影本として韓国教会史文献研究院から1985年に出版されたものもある（李尹美「資料解題 植民地時期豪州宣教師の教育活動—豪州長老会宣教師部資料を中心に」『韓国教育史学』第35巻第1号、2013年3月、265頁）。なお本書の韓国語訳として李元浩・金ソンへ共訳『豪州長老宣教会の釜山・慶南地域宗教並びに教育活動』カンミョン出版社、1995年がある。
- 5) 朝鮮名が確認できる豪州宣教師については、初出でのみ併記する。
- 6) 前掲、李尹美、268頁。
- 7) 『東萊学園100年史（1895—1995）』学校法人東萊学園、1995年、25～29頁。
- 8) 同上、同頁。
- 9) 同上、28～41頁。
- 10) 弓削幸太郎『朝鮮の教育』自由討究社蔵版、1923年、79頁。
- 11) 勅令第62号（『官報』第4605号、1908年9月1日）
- 12) 朝鮮総督府内務部学務局『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』1912年度版、付録の「欧米人及関係学校調」43～44頁。なお、この他に信明学校が1912年認可校として同資料で掲載していた。また、この資料は1912年5月現在存在していた学校についての調査であるので、仮に1909年時点で運営されていてもその後閉校したような場合は含まれていない。
- 13) 朝鮮総督府令第24号（『朝鮮総督府官報』第789号、1915年3月24日）
- 14) 前掲、『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』1912年度版、付録の「欧米人及関係学校調」75・76頁、および前掲、弓削幸太郎、188頁。
- 15) 同上、弓削幸太郎、188頁。なおキリスト教以外の宗教学校としては仏教系学校が当時あった。
- 16) 前掲、『朝鮮人教育 私立学校統計要覧』1912年度版、付録の「欧米人及関係学校調」75・76頁。
- 17) 同上、付録の「欧米人及関係学校調」43～44頁。
- 18) 同上、87・88頁。なお同資料では、豪州長老会の学校として晋州郡「培命学校」も掲載されているが、同1915年版ではフランス天主教となっており間違いと判断した。
- 19) 「昭和三年一月ヨリ昭和三年十二月末日現在 財団法人業務報告」（以下「1928年財団法人業務報告」と略。『私

- 立学校関係書類 釜山府)、「昭和十一年十二月十四日 法人事業報告訂正件」・「昭和十一年十二月二十四日 財団法人事業報告二関スル件」(『昭和十一年学事雑件 釜山府』)。
- 20) 設立の経緯については、崔誠姬『近代朝鮮の中等教育—1920～30年代の高等普通学校・女子高等普通学校を中心に』晃洋書房、2019年、参照。
 - 21) 前掲、『東萊学園100年史(1895—1995)』28頁。
 - 22) 「私立学校教員採用ニ関スル件」文書中「釜山鎮日新女学校沿革」、『私立学校関係書類 釜山府』。
 - 23) 前掲、『東萊学園100年史(1895—1995)』29頁。
 - 24) 釜山直轄市教育委員会『釜山教育史』1987年、62頁。また『東萊学園100年史(1895—1995)』29頁では、「釜山・慶南地域の近代女性教育の嚆矢である私立日新女学校の設立」であったとしている。
 - 25) 前掲、『東萊学園100年史(1895—1995)』28頁。
 - 26) 当時の写真が残っており、またこの建物を後に2階建てに増築したものが、現在も記念館として利用されている。
 - 27) 前掲、「釜山鎮日新女学校沿革」。
 - 28) 釜山鎮日新女学校示物「(昭和11年1月調べ)卒業生状況」及び「卒業写真」。前掲、『東萊学園100年史(1895—1995)』465頁。
 - 29) 前掲、『釜山鎮日新女学校沿革』。ただし、「1928年財団法人業務報告書」の中の「東萊日新女学校沿革大要」では4年制化は1919年となっている。
 - 30) 前掲、『釜山教育50年史』本編の前に掲載された学校の写真および記事(2～3頁)。
 - 31) 「設置認可ヲ受け東萊日新女学校ト改称ス」とされている(「1928年財団法人業務報告書」)。すでに校舎が建設され移転した後に当局の認可が下りたものとみられる。
 - 32) 前掲、Edith A. Kerr and George Anderson、99頁。またこの移転に先立ち1923年4月1日に「釜山鎮凡一町に仮校舎を建て之レニ高等科分離移転ス」という「釜山鎮日新女学校沿革」での記載もあるがその詳細は不明である。
 - 33) 『東亜日報』1926年12月26日。
 - 34) 前掲、「釜山鎮日新女学校沿革」。
 - 35) 前掲、『釜山教育50年史』2～3頁。
 - 36) 現在の錦城中学校・錦城高等学校の場所。同校の記念写真が釜山鎮日新女学校に掲示されており、校舎の前に全校生徒でないかと思われる制服姿の生徒たちが映っている。
 - 37) 『釜山日報』1939年9月20日。
 - 38) 前掲、『釜山教育50年史』、98頁。
 - 39) 東萊郡の中で東萊邑は1942年に釜山府に編入された。孫禎睦『韓国地方制度・自治史研究(上)』一志社、1992年、258頁。
 - 40) 『慶南女子高等学校80年史(1927—2007)』慶南女子高等学校、2007年、269頁。
 - 41) 前掲、『釜山教育50年史』78・87頁。
 - 42) 朝鮮総督府学務局『朝鮮諸学校一覧』1926年版、213・214頁。